

令和4年度

研究・実践報告集

# まちだの実践

第50号



東京都立町田の丘学園

## 目次

はじめに .....	p2
令和4年度以降の校内研究について	p3～4
研究概要説明 .....	p5～9
流れ図（書式） .....	p10
<b>【肢体不自由教育部門の実践について】</b>	
小学部の実践 .....	p11～13
中学部の実践 .....	p14～16
高等部の実践 .....	p17～18
<b>【知的障害教育部門の実践について】</b>	
小学部低学年の実践 .....	p19～20
小学部高学園の実践 .....	p21～22
中学部の実践 .....	p23～24
高等部の実践 .....	p25～p30
おわりに .....	p31

## はじめに

校長 三浦 昭広

令和4年度『まちだの実践（研究報告集）』の発行にあたり、挨拶を申し上げます。今回、まちだの実践は50号を迎えました。これまで、多くの先生方が本校の教育の充実を図るために研究を重ねてこられたことに敬意を表します。また、今年度、本校は開校50周年を迎えました。新型コロナウイルス感染症の影響で記念式典を開催することは叶いませんでしたが、この場をお借りしまして、本校のために御尽力をいただいた皆さま及びお世話になりました皆さまに感謝を申し上げます。

さて、本校では、今年度から「自立活動の視点を生かした協働的な指導について」を全校研究テーマとして実践的研究に取り組んでいます。研究の目的を「～自立活動の視点を生かした協働的な指導とは～」とし、自立活動の視点を生かした指導を次のように定めました。

(1) 特別支援学校において特別な指導の領域である自立活動の趣旨を理解し、両教育部門において、その指導の専門性を高め、児童・生徒の心身の調和的発達基盤を養うこと。

(2) 児童・生徒の困難さの原因や背景を分析して指導すべき課題を明らかにし、その改善克服を意図した自立活動の指導成果を生かして、各教科等の指導充実を図ること。

また、協働的な指導とは、児童・生徒に対する指導内容・方法・分析・改善等について、流れ図の作成等を通し、どのように他の教師と協働的な指導方法を確立していくべきかを検討すること。そして、他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びとして指導の充実を図ること。これらのことが重要であると考えました。そのうえで、次のような研究内容を位置付けました。

(1) 自立活動の視点から、学校教育全体、各教科等の指導において、どのように指導を行っていったらよいか。

(2) (1) について、どのような協働的な指導方法を確立していくべきか。

(3) 自立活動の週時程における指導、個別指導計画への位置付け、保護者との連携等の効果的なあり方をどう捉えていくか。

今年度は、本研究テーマの取り組み1年目として、自立活動指導における流れ図作成の意義や目的、作成方法、活用方法などについて研究を深めるとともに、児童・生徒の可能性を最大限に伸ばせるよう、個別指導の充実を図ってまいりました。本『まちだの実践（研究報告集）』には、この1年間、先生方が取り組んできた教育実践と研究成果が記載されています。

本研究には、多くの外部専門家の先生方に御協力を賜りました。ここに、深く御礼申し上げますとともに、今後とも御指導・御鞭撻をいただければ幸いです。

また、地域の学校及び関係機関の方々、保護者の皆さまにおかれましても、本校の研究や実践等に関して忌憚のない意見等をいただければ幸いです。

そして、この1年間、研究活動に真摯に向き合い、尽力いただいた本校教員に感謝し、私の挨拶といたします。

【研究テーマ・内容・方法の策定にあたって】

- ・「～絶えず研究と修養に務めなければならない」（教育基本法・第9条）
- ・学校長の経営方針を踏まえる必要「令和型教育」「教科指導」「自立活動」等
- ・現場のニーズに即し、当事者意識がもてる研究活動、主体的な研究活動に。

【目指す学校像】

- ・児童・生徒が安心して主体的に学習できる学校
- ・都民・保護者のニーズに的確に応え、地域に貢献できる学校
- ・教職員一人一人が自分の力を発揮でき、やりがいを実感できる学校



全校研究テーマ 「自立活動の視点を生かした協働的な指導について」



1 研究の目的「～自立活動の視点を生かした協働的な指導とは～」

<自立活動の視点を生かした指導とは>

- 特別支援学校において特別な指導の「領域」である「自立活動」の趣旨を理解し、その指導の専門性を高め、児童・生徒の心身の調和的発達の基盤を養う。
- 児童・生徒の困難さの原因や背景を分析して指導すべき課題を明らかにし、その改善克服を意図した自立活動を基盤にして、(これまで研究・整理してきた) 各教科の指導の充実を図る。

<協働的な指導とは>

- 児童・生徒の指導内容・方法・分析・改善等について、流れ図の作成等とおし、どのような協働的な指導方法を確立していくか検討（保護者との協働含む）。
- ➔「他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保する」協働的な教師の学びの重要性  
(「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて (令和3年11月審議まとめ))

2 研究の内容

- ・上記①、②を踏まえ、以下の点を研究内容とする。
- (1) 自立活動の視点から、学校教育全般、各教科等の指導において、どのように指導を行っていったらよいか (指導内容)
- (2) 上記(1)について、どのような協働的な指導方法を確立していくべきか (指導方法)
  - ➔流れ図の作成・活用、行動分析、自立活動と各教科の目標・指導内容を明確にした指導案書式の検討等
- (3) 自立活動の「時間における指導」のあり方 (カリキュラム)、個別指導計画への記載、保護者との連携等

### 3 研究の方法

#### (1) 研究の形態

・A小、A中、A高、B小低、B小高、B中、B高1年・2年・3年の9チーム（自立活動部はいずれかの学部所属する）

#### (2) 研究日

・毎月の学部研日（第2水曜日）、授業・ケース観察日、長期休業中（夏季1回、冬季1回）、校内報告会（公開研究会）（1回）

#### (3) 研究計画

	令和4年	令和5年	令和6年
	自立活動の視点を生かした <u>ケース研究</u> (流れ図と授業略案を活用したケース研究)	自立活動の視点を生かした <u>授業研究</u> が中心 (前年度作成の流れ図と、指導案を活用した授業研究)	自立活動の視点を生かした <u>各教科指導とケース研究</u> (前年度作成の流れ図と、指導案を活用)
4	・全体：研究概要説明	・全体：研究概要説明	・全体：研究概要説明
5	・全体：自立活動とは？	・全体：自立活動の視点を生かした教科指導について	・全体：自立活動の視点を生かした教科指導について
6	・全体：流れ図とは？	・学部研：授業検討（事前検討） ・研究授業① (外専)	・学部研：授業検討（事前検討） ・研究授業③ (外専)
7	・学部研：ケースの抽出（各チーム2名）	・学部研：授業検討（事後検討）	・学部研：授業検討（事後検討）
8	・流れ図作成ワークショップ (外専) ・1人1ケース流れ図作成研修	・流れ図作成ワークショップ (外専) ・1人1ケース流れ図作成研修	・流れ図作成ワークショップ (外専) ・1人1ケース流れ図作成研修
9	・学部研：流れ図を活用したケース検討 ・ケース研究（1日） (外専)	・学部研：授業検討（事前検討） ・ケース研究（1日） (外専)	・学部研：流れ図を活用したケース検討 ・ケース研究（1日） (外専)
10	・学部研：流れ図を活用したケース検討 ・ケース研究（1日） (外専)	・学部研：授業検討（事前検討） ・研究授業② (外専)	・学部研：流れ図を活用したケース検討 ・ケース研究（1日） (外専)
11	・学部研：流れ図を活用したケース検討 ・ケース研究（1日） (外専)	・学部研：授業検討（事後検討） ・ケース研究（1日） (外専)	・学部研：流れ図を活用したケース検討 ・ケース研究（1日） (外専)
12	・学部研：流れ図を活用したケース検討	・学部研：授業検討（事後検討）	・学部研：プレ公開研に向けて
1	・学部研：校内報告会に向けて ・校内報告会 (外専)	・学部研：校内報告会に向けて ・校内報告会 (外専)	・プレ公開研：公開研に向けて (外専) ・学部研：公開研準備
2	まとめ、次年度に向けて	まとめ、次年度に向けて	・公開研 授業公開、報告 (外専)

※年次研対象者のケースを抽出しない（1年目）

# 研究概要

■令和4年度～6年度 町田の丘学園 校内研究について 令和4年3月2日

**【研究テーマ・内容・方法の確定にあたって】**

- 「～絶えず研究と修養に努めなければならない」(教育基本法・第9条)
- 学校長の経営方針を踏まえる必要「令和型教育」「教科指導」「自立活動」等
- 現場のニーズに即し、当事者意識もてる研究活動、主体的な研究活動に。

**【目指す学校像】**

- 児童・生徒が安心して主体的に学習できる学校
- 都民・保護者のニーズに的確に応え、地域に貢献できる学校
- 教職員一人一人が自分の力を発揮でき、やりがいを実感できる学校

**全校研究テーマ 「自立活動の視点を生かした協働的な指導について」**

**1 研究の目的「～自立活動の視点を生かした協働的な指導とは～」**

<自立活動の視点を生かした指導とは>

- 特別支援学校において特別な指導の「領域」である「自立活動」の趣旨を理解し、その指導の専門性を高め、児童・生徒の心身の調和的発達を基盤を養う。
- 児童・生徒の困難さの原因や背景を分析して指導すべき課題を明らかにし、その改善克服を意図した自立活動を基盤として、(これまで研究・整理してきた)各教科の指導の充実を図る。

<協働的な指導とは>

- 児童・生徒の指導内容・方法・分析・改善等について、流れ図の作成等をおし、どのような協働的な指導方法を確立していくか検討(保護者との協働含む)。
- ➔「他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保する」協働的な教師の学びの重要性
- (「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて(令和3年11月審議まとめ))

**2 研究の内容**

- ・上記①、②を踏まえ、以下の点を研究内容とする。
- (1) 自立活動の視点から、学校教育全般、各教科等の指導において、どのように指導を行っていったらよいか(指導内容)
- (2) 上記(1)について、どのような協働的な指導方法を確立していくべきか(指導方法)
  - ➔流れ図の作成・活用、行動分析、自立活動と各教科の目標・指導内容を明確にした指導案書式の検討等
- (3) 自立活動の「時間における指導」のあり方(カリキュラム)、個別指導計画への記載、保護者との連携等

## 1 研究のテーマ、研究の目的と内容について

研究テーマは「自立活動の視点を生かした協働的な指導」とし、今年度から3年間の研究を始めた。研究の目的「自立活動の視点を生かした指導」とは、教員の自立活動に対する指導の専門性を高めるということであり、その自立活動の指導を基盤として、各教科指導の充実を図る、ということになる。

もう一方の目的「協働的な指導」とは、文科省「令和の日本型学校教育」にも「対話や振り返りの機会を、教師の学びとして確保する」と、教師の協働的な学びの重要性をうたっているように、流れ図作成・活用を通して、どのような協働的な指導方法がよいか検討していく、ということになる。

研究内容は大きく3つある。1つ目は、自立活動の視点からどのように指導を行っていくか、指導内容について。2つ目は、どのように協働的な指導方法を確立していくべきか、指導方法について。3つ目は、カリキュラムや個別指導計画への記載、保護者との連携等についてである。

今年度の研究経過		A : とても理解できた とてもよかった	B : 理解できた よかった	C : あまり理解できなかった あまりよくなかった	D : 理解できなかった よくなかった	回答者数
月	内容	A	B	C	D	
① 4月	研修研究の概要 +α	21%	74%	5%	0%	62名
② 5月	「そもそも自立活動って?」	43%	57%	0%	0%	87名
③ 6月	「そもそも流れ図って?」	23%	76%	1%	0%	91名
④ 7月	学部研 ケースの抽出	集計なし				
⑤ 7月末	流れ図作成 (グループワーク)	48%	46%	4%	0%	50名
⑥ 8月末	流れ図作成 (個人ワーク)	55%	38%	7%	0%	60名
⑦ 9月	学部研 (ケース検討①～④)	24%	72%	3%	0%	86名
⑩ 12月						
⑪ 1月	学部研 (発表に向けて)	93%～100%				集計なし

## 2 研究の経過 (年間計画)

4月～6月は、「そもそも自立活動とは?」「流れ図とは?」といった自立活動に関して基礎的な研修を行った。7月に研究対象ケースを各チームから選び、夏休み2回にわたり、実際に流れ図を作成する検討会を行った。9月以降は各チームに分かれてのケース検討会を行っている。

上図右側の数字は、各回、教員に対するアンケート結果である。「Aとても理解できた、とてもよかった B理解できた よかった」という教員が、毎回93%～100%と非常に高い評価となっている。

特徴的なのは、7月末と8月末の流れ図作成ワークショップである。5割前後の方が「とても理解できた」「とてもよかった」という評価になっている。アクティブラーニングの対話型の研修が高評価となった。



# 研究概要



### 3 研究の経過（2学期以降）

上記は2学期間の「流れ図を活用したケース検討」についてのアンケート結果である。両校舎で回答数86名の方のうち、「とてもよかった」21名、「よかった」62名、「あまりよくなかった」が3名で、合計96.5%の教員が、「とてもよかった」、「よかった」と評価している。

教員から意見を分析、まとめることを通して、研究内容の一つでもある「流れ図を活用した協働的な指導」の結果について、次のようにまとめる。

<流れ図の活用について>

- 流れ図から、**課題が精選**されていく様子を感じ勉強になった。
- 流れ図にすることで、**整理すべき情報**が見えた。
- グループでケースの話をするとき、流れ図があると**共通理解**がしやすい。
- 誰が見ても記入内容を見てある程度の**状況を把握**できるため。
- 流れ図を見ると**段階的に考えをまとめたり深めたり**することができると感じた
- 自立活動の視点ということで**焦点化**されている点で、意見交換がやすかった。
- 流れ図を利用することで指導を**理論的**に考えていくことができた
- 流れ図を作成したことで児童の**実態に合わせて**指導方法を考えることができた
- ケースについて流れ図を**根拠**に指導方法について共有できた。

**「課題・情報の整理」、「共通理解」、「状況把握」のしやすさ**  
**「段階的」、「焦点的」、「理論的」で「実態に合わせて」「根拠」ある指導**

### 4 結果① 流れ図の活用について

流れ図の作成・活用することで、「課題が精選されて」「整理すべき情報が見えた」「共通理解・情報把握をしやすかった」という意見が多くあがった。また、「段階的に考えをまとめたり、深めたりできたり」「焦点化」したり、「理論的に考えて」いくことで、実態に合わせて、流れ図を根拠に指導方法を共有しやすいということがあげられる。

まとめると、流れ図の作成、活用は、「実態や課題の整理、共通理解、状況把握」のしやすさがあり、また、指導方法について、段階的、焦点的、理論的に考えやすく、児童・生徒の実態に合わせて根拠のある指導がしやすい」ということになる。

## 研究概要

**<協働的な指導について①>**

- ケースの**実態**について**様々な視点から**協議することができ、**実態把握が深まった**から。
- チームで検討することにより、**指導方法のヒント**を共有することができた。
- 課題が明確になり、さらに多くの先生方から手立ての**アイデア**をもらえ、情報共有もできたので良い。**手立てを実施してみて、どう変化があったかも共有できた**ので良かった。
- 一人の生徒について、自立活動の視点をもちつつ、グループで協議したことで、**多面的にとらえる**ことができた。また、生徒の行動変容など、具体的な成果もあった。

多面的な視点⇒実態把握の深まり・指導方法の広がり → 児童・生徒の成長

### 結果② 協働的な指導について（１）

協働的な指導については、チームで検討し、様々な視点から協議することで、実態把握が深まったり、指導方法のヒントを得られたりできた、ということが多くあげられた。また、実際に指導してみてもどのように変化があったかを共有し、多面的にとらえ検討することで、児童・生徒の成長につながった、という意見も多かった。

まとめると、チームでの多面的な視点により、実態把握が深まったり、指導方法が広がったりし、再度、実践し、また多面的な視点での検討することを繰り返すことで、児童・生徒の成長ということになった、ということになる。

**<協働的な指導について②（多面的な視点について）>**

- 問題行動のある生徒について、**学年の教員全員**で共通理解を図り指導に生かすことができたから。
- 学部の教員が意見を出し合い、共有し合うこと、**学部全員**で同じ目標や手立てで、本人の指導に向かうことこそ、指導力の向上に有意義だと思うから。
- 他学年間の交流**が少なくなっているため、教員も他学年の指導方法など分かりあう機会が減っており、うちの学年はこうしてるよ、など情報交換でき、よかったと感じた。
- ほかの学年の教員や**元担任からの視点**等、普段なかなか聞けないので。
- 集団でひとりの児童の話ができ、特に、**授業グループでの意見交換**や共通理解ができ、有用であったと思う。
- 学年だけでなく大勢**でケースの検討をし、意見を交換できていることに価値があると思う。
- 普段は日々の業務で忙しく、子供の指導について教員同士で話し合う時間がなかなか取れないが、チームで**指導の方向性を確認しあう場**になったので有意義であった。
- 生徒の変化に応じて、**今日はどんな役割で行くか等、隙間時間で話す**ことができたので迷わず関わることもできた。

「学年」、「他学年」、「学部全員」、「元担任」、「授業グループ」等での検討  
（+流れ図6区分27項目からの多面的な実態把握）⇒効果的な指導 → 児童・生徒の成長

### 結果② 協働的な指導について（２）

多面的な視点での指導とは、学年全員、学部全員、他学年、元担任、授業グループなどの大勢で、指導の方向性を確認することであり、隙間時間でも生徒の変化に応じた関わり方を話すことができるようになった。また、もう一方の多面的な視点ということでは、自立活動の6区分27項目の偏りのない、多面的な視点での実態把握もある。

このように検討することで、効率的・効果的な指導となり、それが児童・生徒の成長につながった、ということである。



## 研究概要

### <協働的な指導について③（外部専門員との協働について）>

- 外専の先生からも助言があり、他方からの見解が興味深かったです
- ケース会に近い形で各先生方で意見を出し合い、外部講師の方から助言をいただき非常に勉強になった。
- アドバイザーの先生のコメントや先生方の実践を共有できてよかった。
- 講師の先生や他の先生方の様々な助言を聞くことができたので良かったです。
- 児童の事例について、外部専門家のアドバイスを受けつつみんなで話し合うことができ、児童の成長が見られた。
- 外部専門員からのアドバイスがケース以外の児童に対しても有効であり、勉強になった。

実践⇔学部研・日々の対話⇔外部専門員の助言

児童・生徒の成長  
(対象ケース以外にも)

### 結果③ 外部専門員との協働について

外部専門員、講師の先生との協働もある。実践し教員間で対話したことに対し、助言をもらったり、助言をもらったことを踏まえて実践し、また助言をもらったりすることで、児童・生徒の成長にもつながった。

また、研究対象ケースだけではなく、ケース以外の児童にも有効であったという、協働的な指導の広がりも見られることがあった。

### <あまりよくなかった点>

- ケースの選定について。（教育環境の調整だけでは難しいケースだった）
- 学部研時の学年教員集合率について。
- 短時間での会議設定、ケース会を実施する意義について。

### 結果④ あまりよくなかった点について

一方で、アンケート回収86名中3名の方より、「あまりよくなかった」、という意見もあった。自立活動の視点を踏まえた教育環境の調整だけでは難しく、医療機関とも連携が必要だったケースもあったということで、研究対象の抽出ケースの選定についての課題があがった。

また、月1回の学部研時の教員の集合率の低さや、短い会議時間でケース検討をしなければならない意義についても意見があがった。

ここまでの、2学期までの学部研「流れ図を活用し、どのような協働的な指導方法が大切か」という振り返りになる。

## 研究概要

### <成果>

- 自立活動、流れ図の意義の理解の深まり＝専門性の向上
  - ➡グループワークでの流れ図作成、一人1ケース流れ図作成
  - ➡段階的、焦点的、理論的で根拠のある指導
- 協働的な指導の良さの確認
  - ➡多面的な視点での対話により、効果的な指導、ケースの成長・行動変容

### <今後に向けて>

- ・学校の文化、風土にするための持続性
  - ➡今年度の取組がベース
- ・自立活動を基盤にした、教科指導の充実
  - ➡教科指導と自立活動の目標の明確化

## 5 成果と課題（今後に向けて）

成果としては、各回のアンケート結果からも分かるように、教員の自立活動や流れ図作成の理解が深まったのではないかとということである。それが、専門性の向上に少しでもつながっているのではないか。その要因としては、実際に流れ図を作成してみることで、その良さや意義を実感できたということであつたり、段階的に、焦点的にしぼって、根拠のある指導ができたりしたことかと考えられる。

また、協働的な指導ということでは、チームによる多面的な視点での対話の機会を設定したことにより、効果的な指導を行うことができ、研究対象ケースの成長や行動変容につなげることができたのではないか。

今後については、教員アンケートの中に「今年度の取組を町田の風土にしなければならない」といった意見もあがった。今年度の流れ図作成や協働的な指導の方法をベース基盤として、これを学校の文化、風土にするために、取組の継続性、持続性が必要である。

また、研究内容の一つに、教科指導の充実がある。自立活動の目標と各教科の目標をそれぞれより明確にして、指導の充実を図っていきたい。

### 学びに前向きな人は、働いていても幸福度が高い。

- 楽しく意見交換ができて学年の仲間意識が高まったように感じる。
- 学年で和やかに生徒のことを話しながら外部専門員の指摘やそれぞれの思いを共有することができた。
- 教員がチームとなって児童について話し合えるいい機会となった。
- 学部研に対する熱の入れ方と学部の人たちの話し合いが日ごろから行われているという事実は素晴らしいことと思います。
- 生徒への具体的な対応方法、支援方法、課題解決に向けた指導支援方法を丁寧にイラストや文章、映像等で記憶にしっかりと残りました。外部支援の先生による具体的な支援方法の提示もいただきとてもわかりやすかったです。生徒のリアクションに対しての支援方法がより具体的で、いつ、どんな場面で、どんな瞬間に支援を行うのか等、より詳細に踏み込んだ内容になっており学部研が楽しみです

## 6 まとめ

教員アンケート結果には、学部研を通じて「楽しく、仲間意識が高まった」、「和やかにそれぞれの思いを共有することができた」、「チームとなって」「熱を入れて話しあうことができた」「記憶に残り、分かりやすく、具体的にいつどのように支援を行うか踏み込んだ内容で、学部研が楽しみです」といったまさに学びに前向きな教員の意見もあつた。

日々の学びや学部研究によって、学校の文化や風土など、雰囲気が変わってきたのではないだろうか。

次からは各チームの今年度の取組、実践研究について、報告する。

自立活動 「実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れ図」

学部・学年	教育部門	学部	年	組
障害の種類・程度や状態等				
事例の概要				

実態把握	① 障害の状態、発達や経験の程度、興味・関心、学習や生活の中で見られる長所やよさ、課題等について自立活動の区分に即して整理する段階					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
② 収集した情報を〇〇年後の姿の観点から整理する段階						
.						

指導すべき課題の整理	③ 中心的な課題を導き出す段階					
	.					

指導すべき目標	④ 指導目標を記す段階					

指導目標を達成するために必要な項目の選定	⑤ ④を達成するために必要な項目を設定する段階					
	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション

具体的な指導内容	⑥ 具体的な指導内容を設定する段階					
手立て						
指導場面						